名古屋城大天守宝暦大修理における仮設工事について

A STUDY ON THE TEMPORARY CONSTRUCTIONS FOR THE REPAIR IN HOREKI PERIOD OF THE PRINCIPAL TOWER OF NAGOYA CASTLE

加藤 由香*, 麓 和善**
Yuka KATO and Kazuyoshi FUMOTO

The Principal Tower of Nagoya Castle was restored on a large scale from 1752 to 1755. This paper evaluates and analyses the restoration process of the tower based on the drawings and specifications which have explained about the temporary constructions, such as: scaffolds and bridges that was built inner and outer of the tower. The historical materials that are connected to the plan of the temporary constructions as mentioned above as a large scale restoration might be limited, particularly in Edo Period. By this paper, those historical materials will be explained in detail.

Keywords: *Principal tower of Nagoya Castle, Horeki period, Repair plans, the temporary constructions*

名古屋城大天守, 宝暦年間, 修理計画, 仮設

1. はじめに

慶長 17 年(1612)創建の名古屋城大天守は、寛延 3 年(1750)頃には、天守台石垣の孕みや大天守本体の傾斜が著しくなり、ついに宝暦 2 年(1752)から同 5 年まで 4 年間にわたる大修理が行われた。

この宝暦大修理に関する先学の研究としては、城戸久博士の「名古屋城天守宝暦大修理考」¹⁾、および内藤昌博士の『日本名城集成 名古屋城』²⁾がある。ところが最近、この工事に関する同類の史料が、名古屋の豪商であり、松坂屋デパートの創業家として知られる伊藤家から新たに発見された。そこで、筆者は、名古屋城天守宝暦大修理に関する研究の第 1 報として、まず既知の史料に伊藤家から新たに発見された史料を加え、これらの史料の伝来と転写関係を明らかにした上で、史料に記された工事内容や工事の過程、当時の修理計画について詳細に分析した³⁾。

引き続き本稿では、宝暦大修理に関係する研究の第 2 報として、修理工事の最初に行われた仮設工事の、具体的な計画や工法を明らかにするものである。

2. 仮設工事関係史料

名古屋城大天守宝暦大修理に関する一連の史料の中で、仮設工事に関する史料は、「御天守御修復平之方ヨリ見渡之図」・「御天守御修復妻之方ヨリ見渡之図」・「御深井丸内諸御役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」・『御天守御修復取掛かりより惣出来迄仕様之大法』

(以下『仕様之大法』と略す)である。

「御天守御修復平之方ヨリ見渡之図」・「御天守御修復妻之方ヨリ見渡之図」は、大天守修理のための施工計画図に相当する。また、「御深井丸内諸御役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」は、修理中の名古屋城内全体における仮設小屋の配置図である。現在これらの史料は、伊藤家所蔵の寺町家本の原本と名古屋城管理事務所所蔵の作事方本の写本が確認できる。

また『仕様之大法』は、宝暦大修理全体の仕様書で、現在原本を確認することはできないが、名古屋城管理事務所と宮内庁書陵部に作事方本の写本が所蔵されている。

本稿では、以上 4 史料を基本史料として、宝暦大修理における仮設工事について考察する。

3. 大天守外部仮設

『仕様之大法』によって、工事着手に至る経緯や計画、破損状況、各種工事の詳細な手法、その年月日や手順について読み取ることができるが、日付が明記されているのは、大天守を立て起こすための仕掛けに着手した宝暦 2 年(1752) 8 月 2 日からであり、事始の儀式が行われた同年 3 月 15 日から 5 ヶ月ほど後である。この間には、日付の明示されていない工事場の準備として、仮設設営や大天守の一部が解体されていたと考えられる。

さて、その仮設設営について、『仕様之大法』の「井楼栈橋足代仕

* 名古屋工業大学大学院社会学専攻
博士後期課程・修士(工学)
** 名古屋工業大学大学院社会学専攻 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Socio Engineering, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Socio Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

様」の項には以下のように記されている。

「一 御天守御堀内、東之方劔堀際より南之方劔堀／際迄、北西押廻し都合七拾間余之分、高サ八間／程巾四間 ^{弐間木} ^{ニツ継}、大小角木を以井楼組上、御石垣際／江明り取并石運び道として所々井楼内組明ケ、／御石垣際より四尺程除き、長八間ニ大松丸太北西折／廻ニテ、弐拾七本 ^{北側拾三本} ^{西側拾四本}、鳥居立ニして笠木置／渡し、杉丸太ニテ布結所々銚かけ、右笠木より／井楼上江角木松丸太等置渡し、角木組置へ／御石垣上端ニテ巾四間程足場致出来候」（／印改行、読点筆者、以下同）

まず、大天守北・西側の堀の中に組まれた井楼の足場に関する記述である。一般的に、木材を井桁に組み重ね、隅部において材を互いに切り欠いて組み合わせた建築構造を井楼組というが、名古屋城大天守宝暦大修理関係史料では、〔図2中の①〕のように、角材を1層ずつ直行方向に交互に積み重ねた構造物を井楼と称している。大天守東側の劔堀際から南側の劔堀際まで、北から西に廻る都合70間余りについて、高さ8間程、幅4間の井楼を、長さ2間の材木を2本継にして、大小の角木をもって組み上げ、石垣の際には、明かり取りならびに石材運搬道として、所々井楼の中をあけるように組んだ。また、石垣の際から4尺程除いて、長さ8間の大松丸太を、北から西へ矩折れに27本、すなわち北側に13本、西側に14本、鳥居立に笠木を置き渡し、杉丸太を布で結び、所々銚で止め、笠木から井楼上へ角木や松丸太等を置き渡し、石垣の上端で幅4間程の足場として完成させている。

この井楼の足場については、「御天守御修復仕様平之方ヨリ見渡之図」〔図1〕・「御天守御修復仕様妻之方ヨリ見渡之図」〔図2〕・（以下「平之方ヨリ見渡之図」・「妻之方ヨリ見渡之図」と略す）に、図中の説明文として以下の記述がある。

「西側御堀内井楼巾角木三本たけ、南北中／弐間通り道明ケ、棚付ケ、東西道通り三ヶ所明ケ、／高サ御堀底より八間組上ケ、其上御石垣際斗／追々組上ル、南之方御堀東へ入込之所、／御天守御石垣と御具足多門御石垣之間、御堀之／底より三間上ニテ松丸太切はり入、南之石垣際斗通り共／切立入、其上より井楼組上ケ」（平之方ヨリ見渡之図）

「北側井東之方南へ入込之所共、御堀内井楼／御堀巾一はい高サ御堀底より八間組上ケ、ぬけ道／弐ヶ所組明ケ、其上御石垣斗追々組上ル」（妻之方ヨリ見渡之図）

西側の堀内の井楼には、幅角木3本分だけ、南北中央に2間の通り道を開けて棚を付け、東西に3ヶ所の通り道をあけ、井楼の高さは堀底から8間組み上げ、その上の石垣際は追々組み上げることとした。南端で東へ入り込むところ、すなわち天守台の石垣と具足多門の石垣との間は、堀の底から3間上に、松丸太の切梁を入れ、南の石垣際のみ切立を入れ、その上から井楼を組み上げた。

北側とその東端で南に入り込んだ堀内には、堀幅いっぱい、堀底から高さ8間ほどの井楼が組み上げられ、そこには抜け道も2ヶ所あけられた。

またこの井楼の足場の用途について、図中に次の書き込みがある。

「北側御堀底より石垣際より組上ケ候井楼と、手当ニ／立置候松丸太之間、最初井楼組込置、追々／御石垣取ほくしニ随ひ、右角木取上ケほぐし候、／本山境厚板当テ、角木ニテ押懸テ、

立置候／松丸太より内外杉丸太ニテ切はり入、筋違結堅メ」（平之方ヨリ見渡之図）

「西側御堀底御石垣際より組上ケ候井楼と、／御石垣際手当ニ立置候松丸太之間、高サ／七尺余宛右松丸太ニ腰結、井楼より腕木指、／下棚より追々切立入、角木敷ならへ、ほくし方ニ／相用、御石垣取ほくしニ随ひ、右棚追々取払、／本山境厚板当テ、角木ニテ押懸テ、立置候／松丸太より内外杉丸太ニテ切はり入、筋違結堅」（妻之方ヨリ見渡之図）

北側および西側のいずれにおいても、堀底から石垣際に組み上げた井楼と、石垣の手当として立て置いた松丸太の間に、高さ7尺余りごとに松丸太に腰結いにした腕木を井楼から指し、下棚から徐々に切立を入れ、角木を敷き並べて石垣解体の足場に用いた。そしてこれらは、石垣解体にしたがって、棚を徐々に解体し、石垣解体後は地山に厚板を当て、角木で押さえかけ、立て置いた松丸太から内外に杉丸太で切梁を入れ、筋違で結い堅めることとした。これらの記述から、石垣解体の足場や解体後の土留めに使用したこともわかる。さらに次の書き込みもあり、東方への立て起こしのための刳木による梃子の原理を応用した装置〔図2中の②〕を、東側の井楼上に組んでいたこともわかる。

「東之方へ起し方、御蔵之内北之方三間通明き候所ニテ、／御蔵内より初重之梁下へ、松長八間末口七八寸之丸太を以／からはりかひ、敷盤刳木仕懸ケ、二重目西本側通／御柱外ニ松丸太当テ、夫より苧綱付、杉長丸太ニテ木縄／拵、夫より又苧綱付、東御石垣外井楼上ニテ引五六／七組仕懸ケ、刳矢松丸太長六間余末口尺以上を以、／苧綱壹組ニ弐筋宛付ケ仕懸、刳尻角重り置／棚拵しやち巻」（妻之方ヨリ見渡之図）

「（前略）東側上ケ方、／北之端より四間之所、外側御柱松丸太苧綱ニテ腰結くわん貫指、初重之／梁へ釣むす仕懸ケ、同二重目梁へ苧綱ニテ、切張入、東之方御石垣外／井楼上ニテ刳木仕懸ケ、角木重り置き矢入車知（後略）」（妻之方ヨリ見渡之図）

東側への起し方は、御（穴）蔵内の北寄り3間通り明けた所にて、御蔵内より初重の梁下へ、長さ8間、末口7～8寸の松丸太を以って、から梁を飼い、敷盤と刳木を仕懸け、二重目西本側通の柱外に松丸太を当て、それより苧綱を付け、杉の長丸太にて木縄〔図2中の③〕を拵えて、それよりまた苧綱を付け、東側石垣外の井楼上において引五六を7組仕懸け、刳矢として長さ6間余、末口1尺以上の松丸太を以って、苧綱1組に2筋宛付けて仕懸け、刳尻角に重りを置き、棚拵の車知（轆轤）巻とした。上記のうち、引五六は耳慣れない呼称であるが、〔図1〕右端の引き綱巻き上げ轆轤を「大五六」と称しているので、引五六も轆轤の1種と考えられる。

また、東側の上げ方は、北の端より4間の所で、外側の柱に松丸太を苧綱にて腰結にして門を指し、初重の梁へ釣り結ぶ仕懸けとし、同二重目梁へ苧綱にて締め、切梁を入れ、東側の石垣外の井楼上にて刳木を仕懸け、角木の重りを置き、矢を入れて車知で締めた。

この他にも、上屋や足場を井楼上から組み上げるなど、工事中様々な用途にこの井楼が用いられた。

『仕様之大法』には井楼に続き、棧橋に関する次の記述がある。

「一 北之方ニテ井楼上迄、長弐拾五間巾四間之棧橋壹／ヶ所、西之方御石垣切抜き之所へ、長弐拾四間巾四間之／棧橋壹

図1 「御天守御修復仕様平之方ヨリ見渡之図」(伊藤家所蔵)

図2 「御天守御修復仕様妻之方ヨリ見渡之図」部分(伊藤家所蔵)

ヶ所、各角木を以橋台組立、長三間之角／木、四間五間之松丸太等を以、六通り宛登桁置渡し、／馬踏五寸六寸之角木置並へ、両側手摺杉丸太／取附、大小銚かけ／

一 御天守入口剣塀東之方中程一間切抜、仮ペリ開／戸付、此所より御壺蔵西之方江、延橋巾式間長拾間／程、杉丸太乱杭立、同登桁三通り置、馬踏厚式寸之／挽板並へ、杉丸太手摺取附、所々銚かけ、但北西大／栈橋之儀、各左右江杉丸太ニ柱堀立、登桁置、／長老間厚式寸之挽板敷並へ、杉丸太大竹等を以／手摺取付、所々縄結び銚懸、但仕事之模様ニ随、／右左右之枝橋ハ、所々附替相用ひ候」

大天守の北側に、井楼上まで、長さ 25 間幅 4 間の栈橋を一ヶ所、

西側の石垣切抜きの所へ、長さ 24 間幅 4 間の栈橋を一ヶ所設けた。それぞれ角木をもって橋台を組み立て、長さ 3 間の角木や 4～5 間の松丸太等をもって、6 通りずつ登桁を置き渡し、馬踏(歩み板)には 5～6 寸の角木を置き並べ、両側に手摺を杉丸太で取り付け、大小の銚で止めた。大天守入口の剣塀の東側中程 1 間を切り抜き、仮閉めとして開き戸を付けた。ここから壺蔵の西の方へ、幅 2 間長さ 10 間ほどの延橋を設けた。杉丸太の乱杭を立て、登桁を 3 通り置き、馬踏に厚さ 2 寸の挽板を並べ、杉丸太の手摺を取り付け、所々銚で止めた。ただし、北と西の大栈橋については、それぞれ左右に杉丸太で柱を掘立て、登桁を置き、長さ 1 間厚さ 2 寸の挽板を敷き並べ、杉丸太や大竹などを用いて手摺を取り付け、所々縄で結んで銚で止

めた。ただし、工事の状況に随って、この左右の枝橋は、所々付け替えながら用いることとしている。

大棧橋については、「妻之方ヨリ見渡之図」・「平之方ヨリ見渡之図」にも次の書き込みがあり、『仕様之大法』の記述と一致している。

「西之方大棧橋、長式拾四間巾四間、台角木ニテ／井楼道通り明ケ組立、上ニ松丸太投渡し大鋸ヅ、／角木敷ならへ、所々鋸ヅ」(妻之方ヨリ見渡之図)

「北之方大棧橋、長式拾四間／巾四間、仕様西之方同断」(平之方ヨリ見渡之図)

また延橋については、同図中に次の書き込みもあり、石垣が完成し、天守の組み立てに取り掛かる際には、北にも延橋が設けられた。

「北延橋、御石垣出来後、／建方ニ取懸り候節取付ル」(平之方ヨリ見渡之図)

さらに『仕様之大法』には次の記述が続く。

「一 西之方切抜より南の井楼ハ、北側御石垣出来之／上、不用之井楼取毀し、其木を以て組立、依之北／側井楼ニテ持張候足代上屋等ハ、長七間余之松丸／太立、桁置、御石垣際之鳥居立江布結び固メ、長／四間之松丸太やり渡し、足代上屋ともニ持張せ候」

西側切抜きから南の井楼は、北側の石垣が完成した上で、不要となった井楼を取り壊し、その木材をもって組み立てる。これにより北側の井楼で支えていた足代や上屋などは、長さ7間余りの松丸太を立て、桁を置き、石垣際の鳥居立へ布で結び固め、長さ4間の松丸太を渡し支えるものとする。つまり、井楼は最初から堀全面に組み上げるのではなく、まず北側の井楼を組み上げて、天守台北面の石垣の修理が終われば解体し、その材料で西側切抜きより南の井楼を組み上げる計画である。大量の木材を必要とする井楼を、工事の手順を考えて無駄なく建設したことがわかる。

引き続き足代や上屋に関しては、『仕様之大法』に次の記述がある。

「一 初重より三重目迄、北之方一面、東江折廻し五間余、西側切抜迄、杉／丸太足代堅横三尺間縄結ひ銚かけ、重々上屋下地取付、長／六間七間之指梁入、鼻桁掛、中通りもや桁入、竹榑木廻縄／かき、薄柿葺、但 初重上屋ハ下地同断筈葺、屋根上壱尺間ニ足溜り打、重々／歩ミ板置渡、目隠シ箒囲ひ、所々切張立、筋違入縄結ひ銚かけ

一 北之方御石垣出来之上、右切抜より南并未申角より東江折廻／八間程、前件之通足代上屋共立添

一 四重目御屋根銅葺下地取掛之節、東之方平地より南之方半分平地半分御堀、／より杉丸太足代掛、四方共上屋取付四重目ハ厚八分之挽板二枚重ニテ葺、足溜り打、同三重目二重／目銅葺下地取掛候節、追々右ニ准し四方共上屋足代立添

但四重目足代上屋ハ三重目御屋根上より、三重目／上屋足代ハ二重目御屋根上より仕掛候處、左候てハ、／重々之仕事一度難相来候付、再考之上、四重目／窓より角木を以刳出し仕懸、四重目之上屋持張、／三重目已下各角木刳出しを以、夫々上屋持張候之様／仕掛置、銅葺下地より葺方長(ルビ: チャン)塗御金物取付、／壁方共出来之上、一重ツハ上屋足代共追々取払候」

初重から三重目まで、北側一面と、そこから東へ折廻し5間余り、

西側は切抜きまで、杉丸太の足代を縦横3尺毎に縄で結んで銚で止め、上屋の下地を取り付けた。長さ6～7間の指梁を入れ、鼻桁を掛け、中通りには母屋桁を入れて、竹榑木廻りに縄を搔き、薄柿葺きとした(ただし、初重の上屋は、下地と同様に筈葺きとした)。屋根の上は1尺間に足溜りを打ち、各重歩み板を置き渡し、目隠しとして箒で囲い、ところどころ切張りを立て、筋違を入れて縄で結び、銚で止めた。

また、北面の石垣が完成した上で、切抜きから南側と南西隅から東へ折り廻し8間ほどまで、前述のとおり足代や上屋を立て添えた。

四重目屋根の銅葺きの下地に取り掛かるときには、大天守東側の平地から大天守南側(橋台から東半は平地、橋台から西半は堀)へ、杉丸太で足代を掛け、四方にはいずれも上屋(四重目は厚さ8分の挽き板を2枚重ねにして葺く)を取り付け、足溜りを打った。同様に三重目・二重目の銅葺きの下地に取り掛かるときにも、徐々に上記に准じて、四方とも上屋と足代を立添えることとした。ただし、四重目の足代・上屋は、三重目の屋根の上から、三重目の上屋・足代は二重目の屋根の上から仕掛けたところ、各重の仕事が一度難しくなってきたので、再考のうえ、四重目の窓から角木の刳ね出しを仕掛けて四重目の上屋を支え、三重目以下も各角木の刳ね出しを仕掛け、それぞれの上屋を支えるようにした。銅葺きの下地から葺方がチャン塗の金物を取り付け、壁方とも完了した上で、一層ずつ上屋・足代を徐々に解体していった。上記から工事中に工法の見直しが行われていたことが確認できる。

以上の『仕様之大法』の記述などをもとに、宝暦修理時における大天守の周辺の仮設を図示すると、[図3]のとおりとなる。

4. 大天守内部仮設

大天守内部においても、揚屋のための仮設が設けられた。『仕様之大法』には、揚屋の工法として、以下のような記術がある。

「一 四重目北西折廻し本ケ輪より壱間内江、御土蔵内井楼／上より継柱ニテ鳥居立取附、長四五間末口尺位之松丸太／を以刳木仕掛、惣体腰結刳木之仕懸方右同断」

四重目の北から西へ折廻しに、本側から1間内側へ、土蔵すなわち天守台北側の穴蔵の内側に設けた井楼の上から、継柱で鳥居立を取り付け、長さ4～5間、末口1尺位の松丸太を用いて、刳木を仕掛ける、このような腰結刳木の仕掛け方はすべて同様である、と記されている。つまり、大天守穴蔵から井楼が組み上げられていたこと、またその上部に継柱による鳥居立や、刳木などの仕掛けも設けられていたことが確認できる。

これについては、「平之方ヨリ見渡之図」「妻之方ヨリ見渡之図」にも、下記の書き込みがある。

「北之方上ケ方、御蔵内内側御石垣ヨリ三間明ケ、角木ニテ／井楼組上ケ、初重下刳木之敷盤仕懸ケ、初重本側通／北側西へ壱間折廻し、本側通御柱鴨居下厚板ニテ包／腰結、松丸太長五六間末口六七寸を以苧綱ニテ結、梁下より／切張入、右敷盤之上枕木椶ニテくり合を置、下刳木枕木より／前江壱間余出し仕懸ケ組、下ノ梁江所々苧綱ニテヅ、又下刳／端ニ松丸太ニテ枕木置、上刳木御柱満ニ式本宛、右腰結／下江仕懸ケ、刳尻角木置車知巻候棚取付ケ、所々ニ継／刳木仕懸ケ、桎羽目板重り置／但、上刳木下刳木共松長六間より八間迄末口壱尺式寸より／壱

図3 大天守周辺仮設物配置図

尺七八寸迄、場所見合相用」（平之方ヨリ見渡之図）

「西之方上ケ方、御蔵之内内側御石垣より三間明、角木ニテ／井楼組上ケ、其上より角木ニテ二重目へ立上ケ、松丸太ニテ枕木置、／下刎木枕木より五尺余出し仕懸ケ組、初重之梁へ苧綱ニテ／下刎木端ニ又松丸太ニテ枕木置、上刎木御柱満ニ式本宛、枕木／より五尺余出し仕懸ケ、同端角盤木置、三重目本側／通江角木ニテ切り入、同上刎端より初重之梁下ニ松丸太／当テ苧綱ニテ、二重目本側御柱内ニテ初重梁より二重／梁へ杉丸太ニテ切り入、刎木尻角木置車知巻候棚拵、／所々ニ継刎木仕懸ケ、檜羽目板重りニ置、／但、刎木松丸太、北之方上ケ方同断」（妻之方ヨリ見渡之図）

北側および西側の揚屋には、穴蔵の内側の石垣から3間離れたところに角木で井楼を組み上げ、その上から鳥居立の支柱〔図2中の④〕や枕木および上・下刎木〔図2中の②〕などを仕掛けています。

また、『仕様之大法』にも、揚屋の仕掛けに関して次の記述がある。

「揚方仕掛申八月二日より同十二月廿二日迄／

- 一 右北側仕掛出来申十月五日、揚方致候処、目論見之通り／揚方相成候 御柱毎揚方 多少別ニ記、其以後御石垣取ほくし、足石入／築立之上、西側仕懸ニ取掛り候」

揚屋の仕掛けは宝暦2年申8月2日より同年12月22日までに設営された。北側の仕掛けが完成したのは10月5日で、持ち上げてみたところ、目論見どおりうまくいき、その後に北側の石垣を解体し、補足石を入れて石垣を築いたうえで、西側の仕掛けに取り掛かった。

図4 「御深井丸内諸御役人詰所御作事本所諸番所取建方指図」（伊藤家所蔵）

5. 城内仮設

宝暦大修理に関する一連の史料の中に「御深井丸内諸役人詰所御作事本所諸番所取建方指図」〔図4〕があり、さらにこの図に対応する仕様書として『仕様之大法』の最後に「右御修復ニ付、御深井丸内諸役人詰所、／御作事本所、諸番所、取建方大法」の項がある。これらの史料から、城内における各種仮設物の配置とその仕様を具体的に知ることができる。

まず『仕様之大法』には、西の丸の仮設に関して次の記述がある。

- 「一 榎多門内御作事方預り下多門之内、本所并大工小／屋ニ補理、同南之方大工小屋壹ヶ所、同下多門より附下し、／左官方銅方職人小屋取建
- 一 御蔵構南之方御蔵より附下銅方職人小屋取建
- 一 御蔵構内東之方高塀五拾間余取払、上方竹垣／結び、木挽小屋取立、垣内諸材木置所ニ相成
- 一 下多門西之方、有来増田組小屋并新規仮小屋一ヶ所／取建、葺物類其外足代縄等入置」

榎多門内の作事方預かりの下多門の内、本締所ならびに大工小屋を補足修理し、同所南の方に大工小屋を1ヶ所建て、またこの下多門に下屋を付け足して、左官方・銅方の職人小屋を建てた。御蔵構の南の方の蔵に下屋を付け足して銅方の職人小屋を建てた。ここに記された御蔵構とは、西丸北方の土蔵が建ち並んだ区域のことと考えられる。御蔵構の内、東の方にあった高塀50間余りを撤去し、上方に竹垣を結び、木挽小屋を建てて、竹垣内を諸材木置場とした。下多門の西の方に以前からあった増田組小屋に加えて、新規に仮小屋を一ヶ所建て、屋根葺材やその他足代・縄などを入れて置いた。

以上の記述は「御深井丸内諸役人詰所御作事本所諸番所取建方指図」〔図4〕に描かれている内容とほぼ一致する。西丸南の多門下には、本締所や両奉行の詰所、職人小屋や物置が並び、それに付随して職人小屋が2棟と釜屋が建てられている。蔵構内に設けた竹垣とそれに囲われた範囲が描かれており、その内に木挽小屋が設けられている。しかしその内側が、『仕様之大法』では諸材木置場である

のに対して、絵図では古瓦片付所と記されている。材木や古瓦も含め、各種材料置場として使用されたのであろう。

次に、『仕様之大法』には、深井丸に関して次の記述がある。

「一 上御深井丸西北御高塀際三重御櫓下、御天守内／取払候諸色入置候小屋三ヶ所、大工小屋三ヶ所、新規取立」

深井丸の西北の高塀の際、三重櫓の下に、大天守の解体材を保管するための小屋を3ヶ所、大工小屋も3ヶ所新規に建てた。これについてもやはり「御深井丸内諸役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」に描かれており、深井丸北西の囲われた部分の内側に諸色小屋3棟が見え、その東側に諸色小屋1棟と大工小屋2棟が見える。東側の諸色小屋1棟と大工小屋2棟が『仕様之大法』の大工小屋三ヶ所に相当するものと考えられる。絵図中には、「人足小屋」などと記されながらも、その脇に「追て諸色小屋ニ相用」などと書添えられている部分もあり、小屋については工事中に用途を変更して使用されていたことも確認できる。

『仕様之大法』には、次の記述が続く。

「一 御具足多門下御堀内、釜屋壱ヶ所、職人日用支度所／式ヶ所取立、拍子木御門通り御堀内竹垣結ひ切」

具足多門下の堀の中には、釜屋1ヶ所と職人日用の仕度小屋2ヶ所を建て、拍子木御門の筋に合わせて竹垣を設けて仕切っていた。ここに記された具足多門とは、本丸西辺小天守の西側から西南隅櫓まで延びる多門で、その下の堀とは大天守西側の堀と一連でその南側に続く空堀のことである。これについても「御深井丸内諸役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」で確認することができる。釜屋と仕度小屋2ヶ所の他、この堀内には延橋2ヶ所と番所1ヶ所も設けられている。また、解体した石垣の石や土の保管場所としても使用されていたことが図中に記されている。

城内番所については、『仕様之大法』に次の記述がある。

「一 上御深井丸内有来御城代同心番所、御作事裁許両／奉行出張所ニ相用

但、黒御門御足輕頭、御先手御足輕頭、金瘡醫、御／馬廻組五十人、御目付等、日々此所江罷出、両役衆見廻り／御用被談候節ハ、是又此所江取立寄候

一 御修復中／御前御見廻り之節、右出張所夫々致手当／御腰掛所ニ相成」

「御深井丸内諸役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」では深井丸の大天守の北西に、「出張奉行所」と記された建物が1棟あり、『仕様之大法』に記された上記「奉行出張所」に相当すると考えられる。そして、黒御門足輕頭・先手足輕頭・金瘡醫・馬廻組50人・目付などは、毎日ここへ罷り出で、普請・作事両奉行から見廻りに関する指示を受けるときなどにもここに立ち寄った。さらに修復中に御前の見廻りがあったときには、この出張所に手を加えて腰掛所とした。

「一 御年寄衆御城代衆両役衆休息所、并金瘡方／御目付方詰所、押之者小丈量置之小屋壱ヶ所取立

但両役衆休所不用ニ付、御馬廻り組支度所ニ相用」

年寄衆・城代衆両役衆の休息所ならびに金瘡方・目付方の詰所、(押之者小丈は意味不明)量置の小屋を1ヶ所建てた。ただし両役衆の休息所は使用されなかったため、馬廻組の仕度小屋として用いた。

「一 榎御多門内御足輕番所同頭詰所共小屋壱ヶ所、同／本々所西之方御足輕番所壱ヶ所取建

一 同所蔵構内御深井丸番人詰所出来、有来番所ハ／御作事方物置ニ相用」

榎多門内の足輕番所・足輕頭詰所の小屋1ヶ所、同じく本締所の西の方に足輕番所が1ヶ所建てられた。榎多門内蔵構内に深井丸番人詰所が完成後は、従来の番所は作事方の物置として用いられた。足輕番所・足輕頭詰所については「御深井丸内諸役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」に、榎多門に入ってすぐのところに比較的大きい小屋が建てられており、朱筆で次の書き込みがある。

「榎多御門番所、御先手御足輕頭昼夜相詰、／御足輕昼四人、夜六人不寝ニテ夜廻りを致答、／外ニ同組より昼ハ六人程廻り御足輕出此所ニ／集り居不絶、西拍子木御門際ハ切迄之間／相守り候答」

先手足輕頭は昼夜ここに詰め、足輕が昼は4人、夜は6人が不眠で夜廻りを行った。そのほか同組から昼は6人程足輕がここに出て絶えず集っており、西拍子木御門際が締め切られるまで守っていた。

このほか、榎多門の櫓形内には「此番所ニ御先手組昼夜／式人宛番致答」と記された番所、本締所や両奉行の詰所などが並んだ西端には「釜屋番所、御先手組、昼式人夜三人／不寝番、釜屋辺相廻り候答」と記された番所があり、各所で不眠の警備が行われた。

また蔵構内には「御深井丸番人此所江／移り、昼夜番致答」と記された番所、さらにそのすぐ南には、「此番所、御深井丸番人御蔵構内／番所江移り相勤、此所ニハ番人無之答」と記された番所もあり、深井丸番人が番所を移動したことも確認できる。

引き続き『仕様之大法』には、次のように記されている。

「一 透御門内西之方、黒御門御足輕番所、同頭詰所共／小屋壱ヶ所

一 同御足輕番所、釜屋際壱ヶ所、木挽小屋北壱ヶ所、／御深井丸西御高塀際壱ヶ所、三重御櫓下壱ヶ所、不明／御門内壱ヶ所、以上五ヶ所共取建

但西栈橋上壱ヶ所箱番、黒御門御足輕相勤」

一 塩蔵御門西之方、御城代同心番所、御足輕詰所共小屋／壱ヶ所、御弓矢多門下、同御足輕番所壱ヶ所取立

一 小天守入口、御城代組御足輕番所壱ヶ所、同所御本丸上／御膳場境御台蔵通り板塀ハ附土戸壱ヶ所／取建テ

一 西拍子木御門之西、板塀土戸取付、同所御城代同／心番所、御足輕詰所共、小屋壱ヶ所取立」

透御門内西の方に、黒御門足輕番所・同頭詰所の小屋が1ヶ所建てられた。同じく足輕番所は、釜屋際に1ヶ所、木挽小屋の北に1ヶ所、深井丸の西の高塀際に1ヶ所、三重櫓の下に1ヶ所、不明門の内側に1ヶ所、以上5ヶ所に建てられた。ただし西栈橋の上の1ヶ所の箱番には、黒御門足輕が勤めた。そして、塩蔵御門の西側、城代同心番所・足輕詰所の小屋を1ヶ所、弓矢多門の下に足輕番所を1ヶ所建てた。小天守の入口には城代組の足輕番所を1ヶ所、同じ場所で本丸の御膳場の境、台蔵の通りの板塀を閉めるための土戸を1ヶ所建てた。西拍子木御門の西には板塀と土戸が設けられ、この場所には城代同心番所や足輕の詰所が1ヶ所設けられていた。以上の記述も「御深井丸内諸役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」の当該部分と一致し、そのほとんどの番所に、常に昼夜の不寝番が詰めてたことが朱筆で記されている。

そして、『仕様之大法』にはこれらの小屋の仕様が、次のとおり記

されている。

「一 右小屋都て、杉丸太柱堀立、竹垂木木小舞縄かき、／薄柿葺、椽板張、戸障子立入、壁中塗、畳敷入、／大工木挽職人日用小屋等ハ、杉丸太柱堀立、竹たるき／木小舞縄かき、薄柿又ハ瓦葺等、各土間手簀圍ひニ／テ出来、其外大工小屋諸色置所仮小屋等、随時取立」

小屋はすべて杉丸太の柱を掘立て、竹垂木と木小舞を縄で掻き、屋根は薄柿葺、椽は板張りで、戸や障子を建てこみ、壁は中塗仕上げ、畳も敷かれていた。また、大工・木挽職人の日用小屋などは、同じく杉丸太の柱を掘立て、竹垂木と木小舞を縄で掻き、薄柿葺または瓦葺であったが、土間で、手簀で囲われていた。そのほか、大工小屋・諸色置場・仮小屋などが随時建てられていた。

さて、『仕様之大法』には、次のとおり記されている。

「一 右戊十二月晦日、黒御門御足輕頭組共御先手御足輕組共／引と
り候以後、最初御年寄衆休息所ニ取立候小屋／老棟、御作事裁許兩奉行并本々所ニ相成、黒御門／組番所ハ職人小屋ニ相用、別ニ釜屋老軒、両役所／御足輕詰所一ヶ所輕ク取建

但、同節御城代同心御足輕共、有来御番所へ引移／右明小屋御目付方金瘡方詰所ニ相用ル

一 右諸小屋諸番所共御修復出来之後追々取払」

宝暦4年戊12月30日、黒御門足輕頭組・先手足輕組がその役目を終えて引き揚げて以後は、最初年寄衆の休息所として建てた小屋1棟は兩奉行並びに本締所になった。黒御門組番所は職人小屋として用い、別に釜屋1軒と両役所・足輕詰所1ヶ所を簡単に建てた。ただしこの時、城代同心足輕は在来の番所に移り、こうして空いた小屋は目付方・金瘡方の詰所として用いられた。このように小屋や諸番所は、修理工事完了後、徐々に撤去された。

以上、修理工事中の城内の仮設の配置を、「御深井丸内諸役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」をもとに図示すると〔図5〕のとおりのこととなる。

6. 結論

名古屋城大天守宝暦大修理における仮設工事に関する史料を詳細に分析することにより、以下のことが明らかとなった。

i : 大天守周囲には、幅4間の井樓の足場が組まれ、石垣解体中はこの井樓から土留めの補強が行なわれ、またこの北西面には足場の上に大天守解体部分の保護や工事中の足場を目的とした仮設の上屋が建てられた。また井樓の足場の北・西側に長さ24・5間幅4間の大棧橋が設営され、工事中の資材運搬に用いられた。この他にも延橋が適宜設営・移設された。

図5 「御深井丸内諸役人詰所御作事本々所諸番所取建方指図」より作成した城内仮設配置図

- ii : 大天守内部では、穴蔵内北西に、石垣際から3間ほどあけて井樓が組み上げられ、その高さは初重床の上に達するものであった。この井樓上から角木を立ち上げ、それによって天守上層に梃子などを設け、天守立て起こしのための仕掛けとした。
- iii : 城内全体では、役人の詰所や見張りのための番所、職人や道具・古材などの保管小屋が各所に建てられた。このうち、役人の詰所や番所は、特に門の付近などに集中し、昼夜不休の厳重な警備が行なわれた。一方、職人小屋や保管小屋は大天守に近い深井丸に多く設けられ、この一帯が工事中の作業場とされていた。
- iv : 以上、本稿で分析したような江戸時代における大規模工事の仮設に関する詳細な史料は珍しく、その実態を具体的に明らかにすることができた意義は、建築技術史研究上大きいといえよう。

なお、今後は、天守台石垣修理および天守本体の建て起こし修理等について、詳細に考察していく予定である。

謝辞

本研究に際して、伊藤家・名古屋城管理事務所・宮内庁書陵部から、史料閲覧等のご便宜を賜りました。ここに深く謝意を表します。

注

- 1) 城戸久：「名古屋城天守宝暦大修理考」建築学会論文集 第22号 1941, 9。『国秘録 御天守御修復』(奥村得義編 徳川林政史研究所所蔵)および『名古屋城天守修繕之図』をもとに、工事の経過と関係者、および工事の方法と修理箇所を明らかにしている。
- 2) 内藤昌：『日本名城集成 名古屋城』小学館 1985。名古屋市鶴舞中央図書館・名古屋城管理事務所・宮内庁書陵部に所蔵されている一連の史料が紹介され、この中には、城戸博士が対象とした史料よりもさらに詳しい重要な史料も含まれている。
- 3) 麓和善、加藤由香：「名古屋城大天守宝暦大修理に関する史料と修理計画について」日本建築学会計画系論文集 No. 638 2009, 4。

(2009年4月10日原稿受理, 2009年7月1日採用決定)